蘭坡景茝小論

朝倉尚

● はじめに

(1)〃相公御一咲、又曰、今五岳之中能僧誰也、愚謹白、五六輩有之、各々争機鋒、南禅有蘭坡和尚、相国有月翁和尚・横川和尚、建仁有天隠和尚・正宗和尚、東福有了庵和尚是也、此内孰出群、愚謹白、横川出群者也、〃

（蔭涼軒日録 延徳3・1・25）

(2)〃従万松、五山長老、於公家可准何官乎事、尋承、僧正准参議、可准彼歟、但当時有過分之思、近年内裏御会、蘭坡南禅寺前住、参之時、為大納言之旁輩、極老也、香衣也、当座之会尺勿論々々、可貴々々、〃

（宣胤卿記 明応2・2・10）

蘭坡景茝の禅僧としての行動を検討してみると、二面の存在することに気付く。一は、叢林における生活であり、一は、宮中・公家社会における生活である。

(1)は延徳三年正月廿五日、足利義視（大智院殿）を等持院に葬るが、その際、将軍義材と蔭涼軒主・亀泉集証の間に交わされた会話である。亀泉は横川景三を叢林随一の僧としてあげているが、蘭坡景茝も南禅寺を代表する僧として数えられている。

(2)は、萬松軒宗山等貫が、五山長老の公家社会における相当官位について、中御門宣胤に尋ねたものである。蘭坡が例外的な高官として重視されていたことが判明する。

室町後期の禅僧のうちで、蘭坡ほど禅林・公家社会において、同時に名声を博した僧はいない。

本稿では、禅林・公家社会における蘭坡景茝の文学活動を考えてみたい。

（1）禅林における蘭坡景茝

「本朝高僧伝」には、蘭坡の略伝として、

(3)〃釈景茝、字蘭坡、稟法大模軌公、夢窻国師四世之孫、聰慧夙発、於諸書史靡不該研、歴遷諸刹後住南禅、上堂挙、…、謝事居正因菴、文亀元年終於菴中、有仙館集・雪樵独唱集、茝在世日、後土御門帝屢召問法、後柏原帝追褒、賜諡仏慧円応禅師、〃

と載している。

(イ) 出自・年令について

出身については、諸書未詳とするが、

(4)〃前刻宝公話云、大友畔主（黒主）者紀之淑氏云者也、謀叛仁也、於江州被誅之也、蘭坡和尚者其后裔也云々、〃（蔭涼軒日録 明応2・7・6）

という話を、蔭涼軒日録が載せている。

紀姓。〃謀叛仁也〃に注意される。貴族化した叢林においては、出自は重要視される。

蘭坡の年立については、確定的なものはない。年令を扱っている記事としては、まず

(5)〃赴西山正持庵宗猷達悟禅師徳叟和尚一百年遠忌之斎会、…中略…、蘭坡和尚八十一歳、領正持庵塔主、焼香礼拝不少屈也、〃（鹿苑日録 明応8・3・12）

(6)〃蘭坡入院以前月翁先入院事、御免許珍重之由、鹿苑院被白之可為如何哉、相公御許諾、月翁蘭坡同年、位次月翁為上首之由白之、雖可為住持一夜三日留帯可然由白之、〃（蔭涼軒日録 文明17・7・15）

(7)〃訪栖芳和尚、衰朽為甚矣、訪法住和尚、忠脚疾、問年則八十一歳、与栖芳（月翁）同甲子、〃（鹿苑日録 明応8・3・1）

などがある。

(5)は、明応八年（一四九九）に八十一歳で正持庵塔主を領したことが記されている。(6)は、蘭坡が南禅寺に入院する際の記事で、「月翁蘭坡同年」とあるのに注目される。月翁周鏡は、(7)の鹿苑日録によると、明応八年時に八十一歳である。

(5)～(7)によれば、蘭坡は明応八年時に八十一才であるから、応永廿六年（一四一九）の誕生ということになる。死没の文亀元年は八十三才。

ただし、月翁周鏡の年令に関しては、蔭涼軒日録・文明十九年正月十九日条では〃又曰、等持月翁如何、六十八歳、〃とある。逆算すると、明応八年には、八十歳ということになる。

さらに、鹿苑日録には次のような注目すべき記事がある。

(8)〃予署金溪、則嵯峨門下今一人耳、位貴寿高、而寺務清直、便于庶事、五山可亦従之、到当院則不可望之、負以僧録之名、事無大小、係于一身者也、今雖有蘭坡於当寺、無門派者、寿已八十四歳、豈可得司之哉、故署金溪也、〃（鹿苑日録 永正元・4・旦）

鹿苑院主・景徐周麟が俗姪・大舘伊与守（尚氏か）を介して将軍に退院の意志を説いたものである。記事中の蘭坡は、永正元年（一五〇四）八十四歳である。

右の記事の第一の問題は、蘭坡の没年は文亀元年であり、永正元年には生存していないということである。（前後の記事からみて、本稿の蘭坡と日録中の蘭坡と別人であるとは考えられない。）

(8)の記事、鹿苑日録八については、永正元年の記事として扱われているが、わたくしは明応九年の記事ではないかと考える。例えば、鹿苑日録八・永正元年二月十五日条には、〃読宗鏡録第三巻畢矣、此本五大堂普観者七十九歳、永享十二年庚申之年加点者也、蓍老僧之生年也、于今六十一年矣、今読之偶然乎、今年歳次庚申也〃、とある。永享十二年（一四〇）は庚申にあたり、記事に誤りは認められないが、「今年歳次庚申也」については、永正元年は甲子であり、庚申の年ではない。明応九年（一五〇〇）が庚申にあたる。また、鹿苑日録八の表紙には、文亀四年二月三十日に永正元年と改元されたことを記した後に〃至四月　五日勝定国師百年忌云々、因為証、〃とある。た

しかに、四月五日の条には、傍書として〃勝定国師百年忌、促在今月今日、昨雨乍晴、五山東堂西堂会合、〃とある。絶海中津（勝定国師）の没年は応永十二年（一四〇五）で、百年忌は永正元年（一五〇四）にあたる。しかし、「促」（つづめる）とあるので、直ちに表紙のように「因為証」わけにはゆかない。百年忌の計画については〃斎後会于勝定院、聞諸老及院衆評国師百年忌事、〃（鹿苑日録明応8・12・5）と、明応八年からなされている。明応九年に繰上げて催されたものと解すべきではなかろうか。》

第二の問題は、例え(8)の記事が明応九年のものとしても、明応八年時は八十三才となり、(5)〜(7)による八十一歳説と矛盾してくることである。

蘭坡の年立については、不明な点が多い。

(ロ) 法統について

(5)・(6)・(8)については、さらに注目すべき点を含んでいる。

(5)については、西山（天竜寺）正持庵において宗猷達悟禅師徳叟周佐の百年忌が催されている。扶桑五山記三・天竜寺住持位次、徳叟周佐の条には〃冊夢窓、応永七庚辰三月十二日寂、塔于正因菴、在西山曰正持菴、諡宗猷達悟禅師、……〃とある。蘭坡は正持庵主でもあったが、平素は、南禅寺内の正因菴仙舘軒に居住していた。正持庵・正因庵は、ともに徳叟周佐の開いたものである。

このことは、蘭坡の法統に関係する。

(9)〃又拈香云、這香爇却炉中供養前住南禅大模老漢、以酬法乳之恩、〃（雪樵独唱集二 臨川禅寺入寺語録）

(10)〃又拈香、這爛柴片、秘在無底袋裡者久矣、今日拈出、插向炉中、供養前住寿福後住当山大模老漢、〃（雪樵独唱集二 南禅禅寺入寺語録）

のように、蘭坡は大模梵軌に嗣法している。蘭坡の法系を略図で示すと、

夢窓疎石
- 春屋妙葩 — 竺中周蘭 — 月翁周鏡
- 竜湫周沢 — 在中中淹 — 周堂中材 — 景徐周麟
- 徳叟周佐 — 大模梵軌 — 蘭坡景臣
- 絶海中津 — 周剛乾治 — 金溪梵鐸

となる。蘭坡は、夢窓派の中でも徳叟周佐を祖とする正持門派に属している。徳叟周佐の庵に居住した理由である。

この正持門派、夢窓派下とはいえ、あまり振わなかったようで、(6)・(8)がそれを示している。

(6)。南禅寺入寺に際し、「同年」でありながら「位次」が上であるとして、月翁の方を蘭坡より先に入院させている。（形式的。九月に入院し、翌十月に退院す。）月翁は、春屋—竺中の鹿王門派に属している。

(8)。景徐周麟は、蘭坡がすでに老令であることと同時に、「無門派者」である点を指摘し、鹿苑院主に推していない。景徐の推した金溪梵鐸は絶海中津の霊松門派に属している。

「低位次者」「無門派者」であることが、蘭坡の叢林における活動を窮屈にしていたであろうことが想像される。

(ハ) 住院について

蘭坡景臣は南禅寺内に仙舘院を開き、これに拠っている。仙舘院の旦那・領地に関しては、

(11)〃又南禅仙舘院領、備軽部四分一、大舘古上総介殿寄進、為仙舘檀那、只今亦両大舘為檀那、…中略…、仙舘住持蘭坡和尚、以一行見白之、〃（蔭涼軒日録 長享2・9・16）

という記事がみられる。旦那が大舘氏である点に注意したい。景徐周麟との親交も当然のことである。「古上総介」については、鹿苑日録・長享元年八月廿九日条に〃午後摠持院尼長老来賀、東山相公長女、母者大とある「大舘上総故入道」と同一人かと考舘上総故入道息女、〃えられる。息女が義政の側室になっている

蘭坡は、すでに述べた仙舘院・正持院（(5)参照。また月舟寿桂の「幻雲稿」・蘭坡和尚住相国江湖疏によると文明十四年以前にも住院す。）のほかに、左のような寺院・塔頭に住していたことが明らかである。

住院内容	住院の確認できる年月日	出典作品名
(1)臨川寺住持	文明7年12月24日入院	補庵京華前集・〃蘭坡住臨川道旧疏〃。雪樵独唱集・入院法語。
(2)南禅寺上生院	(イ)文明11年	雪樵独唱集・〃竜安寺殿七周忌香話〃。
	(ロ)明応8年	鹿苑日録・明応8・11・28条
(3)北等持（等持院）	(イ)文明12年10月入院～文明15年10月（？）退院	御湯殿上日記・文明12・10・16条。御湯殿上日記・文明15・10・2条。
	(ロ)延徳2年4月11日入院～明応2年2月7日退院	蔭涼軒日録・延徳2・3・17条、同4・13条。蔭涼軒日録・明応2・2・7条。鹿苑日録に退状あり。
(4)相国寺住持	(イ)文明14年	幻雲稿・〃蘭坡和尚住相国江湖疏〃。鹿苑院公文帳。
	(ロ)明応8年～明応9年	鹿苑日録・明応8・11・8条。鹿苑日録・明応9・1・17条。
(5)常在光寺住持	文明17年	雪樵独唱集・〃遠碧院殿十三年忌香語〃
(6)南禅寺住持	(イ)文明17年10月13日入院～長享元年	蔭涼軒日録・文明17・10・13条ほか。雪樵独唱集・南禅寺語録。
	(ロ)長享3年6月入院～長享3年8月29日退院	蔭涼軒日録・長享3・5・18条、同5・27条ほか。蔭涼軒日録・長享3・8・29条。
(7)相国寺林光院	長享元年12月～	蔭涼軒日録・長享元・閏11・4条、同12・21条。

右の表によって、簡単ではあるが、蘭坡景茁の住院歴が判明しよう。

住院歴を検討する上で見逃せないのは、その任命に大きな力を有する幕府・将軍との関係である。蘭坡は、常在光寺に住持する際、

(12) 〃凡常在事者、自往古紫衣老僧住之、終焉之地也、先是蘭坡和尚為相国前住望常在住持事、慈照院殿曰、此寺者紫衣老僧住之、終焉之処也、今為相国前住望之不理也、…中略…、雖然蘭坡一人事者可有御免、於後々不可為例由被仰出、〃

（蔭涼軒日録 延徳2・4・15）

と、慈照院殿より例外として扱われている。将軍義政に寵を受けていたことが判明する。

将軍義材の受戒に際して、

(13) 〃愚謂葉公云、三会塔主事御受衣若有御延引者、先以蔓瑞和尚可有御定乎、当年中亦有御受衣者、已前所白月翁・蘭坡・横川三老内、任御意可有御定乎、乃達台聴、…中略…、相公曰、然者以横川可相定、可伝命云々、〃

（蔭涼軒日録 延徳3・5・10）

と、戒師をつとめる三会院主の候補になっている点にも注意される。義材は七月八日に受戒している。

(二) 叢林における文学活動について

叢林における蘭坡景茁の文学活動については、その住院歴からも多方面にわたっていることが想像される。

蘭坡景茁の作品集「雪樵独唱集」五冊（大東急文庫蔵）の内容は、第一冊に陞座法語・拈香法語・小仏事法語・賛等、第二冊に入院法語・上堂法語・小参法語等、第三冊に疏類、第四冊に記・序・説・賛・偈頌・道号等、第五冊に詩類が収められている。

時代が降り禅林が貴族化するにつれ、純然とした詩文作成の割合が増す。蘭坡の作品には詩文がそれ程多くないのに気付く。

(イ) 希世霊彦との交渉について

禅僧の文筆活動を考える時、無視できぬのは、その師承関係である。禅僧が作製しなければならない法語類・疏類等の作品には、四六駢儷文や禅林特有の表現を使用しなくてはならない。

蘭坡は希世霊彦より講学・文筆の業を受けたといわれている。希世の講学のうちでは、蒲室疏法と三体詩が著名で、ともに惟肖得岩・江西竜派より伝えられたものといわれる。

蒲室疏法は四六文作成法則を記したものである。

雪樵独唱集の第三冊の末尾には、文明十四年作成の希世霊彦の序跋を載せている。

(14) 〃老坡翁一生遊戯乎四六駢儷之文、其行于鼓林者、於今四十余年矣、毎一篇成、躬自手之、而過于予、大似不避暗投按剣之盼焉、今既編集、成一鉅帙、且俾予着語品評、予以為坡翁一生駢儷之文、猶如紀渻子養鬪鶏然、其蚤年之文、所謂方虚憍而恃気也、其中年之文、所謂猶疾視而盛気也、其暮年之文、所謂望之似木鶏矣、其徳全矣、異鶏無敢応者也、然則於駢儷之文、雖一世詞場之士、亦不奈他坡翁何、

文明壬寅重陽後一日書于聴松之村庵霊彦

時年満八十歳〃

としている。蘭坡の四六文作製が四十余年にわたること、一篇の成るごとに希世に評を求めたこと、若年よりの作風の変化のことなどが記されている。（なお、第三冊の末尾には文正元年閏二月に書かれた翱之恵鳳の序跋もある。）

蘭坡の四六文が叢林に行なわれたことは、桂林徳昌・常庵龍崇の作品とともに蘭坡の四六文を集めた「桂林駢儷・寅闢四六後集・雪

樵独唱集」と題する一本が建仁寺両足院に蔵されていることでも判明する。（（両足院蔵の雪樵独唱集は大東急文庫蔵の雪樵独唱集第三冊疏類を集めた部分に相当する。ただし、疏のうち最後部分と希世霊彦の序跋だけを欠いている。集の成立を考える上で貴重である。））

なお雪樵独唱集の「雪樵」とは、蘭坡景茝の斎名・別号であるが、これに題して、希世は

(15) 〃　為蘭坡題雪樵斎　有序

少室立雪之後、曹溪采樵以来、是雪是樵、互相光耀、蓋謂之一花五葉、至于黄梅、而其衣法能者得焉、自時厥後、吾宗大振、起児孫遍寰宇、猶敷盛哉、蘭坡以雪樵目其室者、不翅拈出吾家旧公案、亦将有所矜式、必如百衲帔、天寒歳晩、乃見其効耳、蟬闇老人四句妙偈、規視所至、不鄙、命予贅于其末云、

雪中樵客欲帰家、白尽蓑衣山路斜、遥想経過鎮頭処、担肩薪上插梅花、〃　（村庵稾）

という一詩を製し、贈っている。

記録・作品に見られる蘭坡景茝と希世霊彦の具体的な交渉については、まず、

(16) 〃早晨赴聴松院斎、先往方丈賀文和々尚住持、往聴松於書院相見、院主彦希聖、蘭坡・桃源・継章在座雑話、其後正宗・了庵・月翁・惟明・横川・春陽・桂林・功叔・蠡真・丹首座・悟上司等相見、院主出半斎、焼香蘭坡、維那才首座、迎礼香蔵主、斎会如先規、斎罷又往書院、茶話移刻、〃　（蔭涼軒日録　長享元・10・16）

のように、南禅寺聴松院での斎会におけるものがある。(16)で判明するように、参加僧は当時を代表する禅僧であるが、蘭坡が主位であることが多い。

詩会・連句会に同席することも多い。

(17) 〃　仙山楼館図　岩栖与天隠横川益之諸公過予仙館

架空飛閣眼俱明、道是弱流三萬程、遥識群仙和月降、松風吹落玉簫声、〃　（雪樵独唱集）

(18) 〃　仙山楼館図　為臣蘭坡題

何処仙山入畫図、重々楼館隔塵区、恠来茆屋三間窄、収得蓬萊方丈無、〃　（村庵稾）

(19) 〃　丙午之春二月二十一日、源典厩第、桜花盛開、因招予及蘭坡・横川・正宗・天隠・了庵・桃源・春陽・景徐、而宴会花底、例索予詩、書以呈焉、

桜樹一庭花一欄、花前会客惜春闌、同来六七蓋禅老、只作破顔微笑看、〃　（村庵稾）

(20) 〃就禅昌院斎会、主位聴松・桃源・正宗・了庵・景徐、賓位東啓美少・月翁・蘭坡・天隠・横川・春陽・愚・蠡真、主席十四員、斎三汁十三菜、菓子雲種、茶了各雑話、踏雪赴浴、々鼎張宴、先置盃有聯、…連句省略…、其懐帋聴松翁懐之、著座衆位次如斎会時、主末加南陽、賓末加中書、以上十六員、皆聯衆也、〃　（蔭涼軒日録　長享2・2・14）

などを例としてあげる。(17)・(18)は岩栖（希世）をはじめとして蘭坡の仙舘院を訪れ、詩会を催している。(19)は文明十八年二月二十一日、源典厩（細川政国・禅昌院）第の詩会における作品である。(20)は、禅昌院での斎会後の連句会の記録で、十六名の連衆によっている。

希世霊彦の作品集「村庵稾」には、次のような作品（抄出）が眼につく。

(21) 〃 闌坡老人之徒濕公上人、字曰春雲、寄此畫軸而求詩於予、輙題其上、卷而還之、文明十年戊戌之秋、書于丹陽之村庵、〃

(22) 〃 右為安世東少年、題安世、是仙館坡翁之当鑒也、予以此字称之、其所期望不浅矣、至祝々々、〃

(23) 〃 文仲寅公上人、従学於仙館者久矣、携畫軸来求詩、輙題以還之、〃

と、闌坡門下の僧が、作品を求めている。闌坡と希世の親密な関係を示唆している。

希世霊彦は、長享二年六月廿六日に死去している。闌坡は、

(24) 〃 四鼓刻彦希聖遷化、其曉閑維、々々之儀人皆不識、卅日於仙館々々老人話之、〃 (蔭涼軒日録 長享2・6・26)

と、中心になって仏事を営んでいる。

その死後、闌坡が希世のために尽力したことに、禅師号のことがある。

(25) 〃 坡又云、彦希聖禅師楞之事如何、愚云、名字為侍者有禅師号之先規有之者可書賜、坡云、両人有之、皆吾寺請客侍者也、然者書立其両人、被相副御一行可賜、以御機嫌可何之云々、〃 (蔭涼軒日録 長享3・6・3)

(26) 〃 闌坡和尚来云、聴松禅師号事、與聴松徒談之、彼先祖大鑒天鏡有之、依之鏡之字望也、智鑒明照禅師可歟、愚云、恰好々々、然者書之以可達伝奏云々、〃 (蔭涼軒日録 長享3・6・12)

と、希世霊彦の一周忌を機に、禅師号を朝廷に望んでいる。闌坡は、南禅寺住持、あるいは講釈や連句連歌会を通じての宮中との関係を背景に、奔走している。希世の禅師号は闌坡の尽力によっている。

(二) 詩会・連句会への参加について

闌坡の詩作は、雪樵独唱集第五冊に収められている。

闌坡の禅林における詩僧としての地位は、室町時代後期の代表僧七人の詩を撰んで編まれた「北斗集」に、月翁・天隠・正宗・了庵・桂林・景徐とともに、闌坡の詩も載せられていることでも一端が知られる。

闌坡の作詩活動のうちでは、まず、

(27) 〃 寄岐陽春濕侍者

岐陽何処是君家、八九月間秋可佳、残雨吹寒作微雪、楓林鋪錦々鋪花、〃 (雪樵独唱集)

〃 雪樵大禅仏(師)、寄投黄花数枝於惟久老人之影前、以為法供、且有尊倫、謹賛韻末云、

禅翁哀慕老門生、菊若有情陳此情、不恐裂裟遭露濕、籬辺乎折晩秋英、〃 (松蔭吟稿)

のように、個人的な親交のもとに、詩が贈答されているばあいがある。例は非常に多い。当然のことといえよう。

しかし、本項では、禅僧の諸記録・諸詩文集に、闌坡の参加した詩会、連句会に関する記事があるが、その一部を紹介する。

禅林における詩会の実態をよく示し、かつ、闌坡の参加している例として、

(29) 〃 桃源・高先来曰、来十一日於竜興軒有詩会、携桂公可出、以竜興賞牡丹為題、鹿苑院主亦可光降云々、竜興花事見于坡詩第十四惜花詩跋、〃 (蔭涼軒日録 文明18・3・7)

(30)〃斎罷会于竜興軒、鹿苑院惟明・南禅蘭坡・天竜舜沢・勝定喬年・小補横川・霊松冥瑞・霊泉正宗・大昌天隠・大慈了庵・東堂九員、勝鬘桃源・雲居高先・等持春陽・一滴顕室・一睡寿春・宜竹景徐・宝篋泰甫・蔭涼某・西堂八員、其外平僧数十員、秉筆高秀峰少年・岱東雲・桂竺英・鶴九皐少年・殊勝岩・球廷章・玉如琢・琳潤英八人也、詩後有宴、一時快也、及晩醉帰、〃

（蔭涼軒日録 文明18・3・11）

をあげる。(29)・(30)を通じ、詩会の規模や準備の状態が明らかになる。詩題については、右の例のばあい蘇東坡詩より詩会の催された竜興軒にふさわしいものがあらかじめ用意されているが、当日〃評題〃と称して合議して決めることもある。（（蔭涼軒日録・長享三年三月十五日条等参照。））

記録類に記された蘭坡の参加した詩会には、

(31)〃今日於寿徳軒有会、蓋通泰甫為天竜楞厳頭鶴九皐設此宴、以松風閣為題、凡詩衆十員、秉筆者十員、…〃（蔭涼軒日録 文明19・5・17）

(32)〃棱厳頭瑞朝侍者於禅昌院開詩場、南禅蘭坡和尚…中略…、以銀河秋気為題、一時盛事也、〃（鹿苑日録 長享3・6・28）

(33)〃往聴松、…（題評）…、雖被督再三皆辭酌之、栖芳開題、小補書題、以松声愈好為題、主人南陽打題、於客殿斎、…中略…、及午後各書詩、秉筆小僧三人、詩了有宴、十五員、外秉筆三人、少年一人、并十九人、盃四出之、〃（蔭涼軒日録 延徳2・12・19）

(34)〃此日於北等持有詩会、以花下話旧為題、〃（蔭涼軒日録 延徳4・1・27）

などがある。(31)では惟明・月翁・横川・桂林・景徐・彦竜等と、(32)では天隠・正宗・桂林・了庵・月翁・横川・彦竜等と、(33)では月翁・正宗・春陽・桂林・天隠・景徐・横川等と同席している。(34)は北等持院主として蘭坡が催したものである。横川・了庵・正宗等を招待している。

次に、各禅僧のうち、とくに蘭坡・横川・景徐・天隠の詩文集により、蘭坡が参加している詩会について、二例ずつあげる。

(35)〃　花下話洛与横川万里景徐会于江之草野

洛社三年尽作空、耆英遁在野花中、相逢不覚天涯遠、梅似深衣司馬公、〃

（雪樵独唱集）

(36)〃　霜葉如花与了庵乃于城中

風雨千林秋易鹿、吹紅葉々為誰新、吾衰不夢見花久、只可停車強作春、〃

（雪樵独唱集）

(37)〃　秋菊佳色岩栖来訪、蘭坡・天隠・益之・亀泉・春陽・景徐同来、崇山佳君執筆

野草姓劉秋已皆、東籬剩色興時乖、天遺一老祇林晩、不管花佳人亦佳、〃

（補庵京華前集）

(38)〃　題和清像会招慶斎、題予所出、到日蘭坡・正宗・天隠・益之諸老、不速来矣、

孤山雖小節高哉、杭守不来門不開、聖主東封新雨露、水辺籬落雪埋梅、〃

（補庵京華続集）

(39)〃　仮山小雨南禅蘭坡了庵来訪

纍土為山古寺庭、欄前欲雨昼冥々、笑迎二老仮非仮、分破竜峰一半青、〃

（翰林葫蘆集）

(40)〃　春遊先花会于恵阜堆雲軒、蘭坡・天隠・了庵漱頭、

遊事先従正月加、城南尺五梵王家、高僧白髪両三輩、留與少年看

落花、〃　（翰林葫蘆集）

(41)〃　仙山楼観図　在南禅闌坡居作之

鰲背青山隔弱流、琪花瑤草不知秋、仙家亦有文章伯、十様蛮箋修鳳楼、〃　（黙雲詩集）

(42)〃　初冬遊寺村庵闌坡横川来

孤村短日報初冬、適伴翁々喚雨筇、吟興未闌斜照後、烏巾立尽寺楼鐘、〃　（黙雲詩集）

詩会への参加に対して、連句会への参加状態については、はっきりとしない。

(43)〃去十四日東福方丈之会話之、句纔八句有之、自佗院美丈二人来、一美字曰隷叔、破題云、星鳳誰先覩、闌坡云、雲竜云竝遊、…横川・景徐・正宗・春陽・了庵・景雪の句あり…、八人外無別人云々、〃　（蔭涼軒日録　延徳4・2・17）

のような例がある。

(三)　そのほか

闌坡の注目すべき作詩活動では、そのほか

(44)〃伊勢瑞松院以雲扇十本可下大内方、贊事所望之由被達小補、々々書立十員、一本充被命之、月翁・闌坡・天隠・横川・正宗・了庵・桃源・春陽・景徐・及愚十員、闌坡・了庵・春陽・愚四員、即今直取之帰、愚所取唐船也、〃　（蔭涼軒日録　長享3・2・17）

(45)〃明叔云、自織田太和守方屏風書賛事白之、十二枚有月翁・闌坡・天隠・横川・正宗及愚六員、各二枚宛、自餘皆命之、横川事者自愚方可白云々〃　（蔭涼軒日録　長享3・8・29）

(46)〃今年正月旦建仁正宗俗姪竜崇侍者為侍香、住持桂林昌和尚賦一偈賀侍香、仍請諸和、乃皆撃節、愚亦備員、近日其和皆上軸、本韻為首和者、月翁和尚・闌坡・天隠・横川・了庵・春陽・継章・仁甫・景徐及愚、々拙偈今日書之軸、〃（蔭涼軒日録　延徳2・6・22）

(47)〃織田勢州太守常松居士、号秀峯肖像、厳中和尚賛、同太和守敏定肖像、闌坡和尚賛、同甲冑像、益之和尚賛書之、以使茂叔伝小補、々々謝詞有之、〃　（蔭涼軒日録　延徳2・8・13）

などがある、(44)は、時代が降るにつれ扇面画に題した詩が激増するが、画扇に対する賛を依頼されている。(45)は、屏風画に対する賛である。(46)は、常庵竜崇が侍香に転じたことを賀する詩軸に、闌坡も和詩を書している。禅林における詩軸の盛況も、見逃せない現象である。(47)は肖像・影に対する賛である。

禅僧同士、あるいは禅僧と武家・公家との交渉を考える時、画（影）、詩軸は無視できない存在である。(44)～(47)は実態の一端をよく示している。右の例のほかに、

(48)〃春陽翁来、面之、屏風画賛請之、予所取雪山也、月翁・闌坡・天隠・横川・正宗・了庵・春陽・継章・仁甫・桂林・景徐及予、十二員也、濃州西尼乞之云々、〃　（蔭涼軒日録　延徳4・3・28）

(49)〃　讃州府君招闌坡・天隠・余飯龍挙酒、酔中出画軸求詩、三人走筆云、

龍釣帰時迷水雲、数椽茅屋欲斜曛、報言走馬過橋客、願折梅来持贈君、〃　（補庵京華後集　梅溪稿）

(50)〃　題勢州府君画馬屏風希世・闌坡・天隠・同賦、皆立丈馬云、

漢家天馬自権奇、勢在回頭絶背時、竜厩不羈千里志、枯楊妃痒

北風吹、〃　（補庵京華後集）

などをあげておく。

(49)は、補庵京華後集（横川景三著。五山文学新集・第一巻所収）と、梅溪稿（雪嶺永瑾著・続群書類従所収。）と、両集に収められている。が、横川景三の作品であろう。（調査の結果、梅溪稿の後半部には横川景三の作品が多く混入していることが判明している。）

闌坡景茝の詩僧としての力量については、

(51)〃　春夢　仙館有点

黒甜郷裏寄身時、春院無人蹤影移、日午夢香花下枕、白鷗未覚蝶先知、〃　（幻雲詩藁第一）

のように、添削、合点を依頼されていることによっても知られる。次のような例もある。

(52)〃…詩省略…、竜皐春庸首座、集其平日所作之詩一百篇、就雪樵師、求筆削、於是撰取四十餘篇、且批之且点之、仍題四韵一章以賜之、……〃　（翰林葫蘆集「寄岐陽天寧寺」より）

以上、闌坡の詩作活動の検討を通じ、闌坡が禅林を代表する詩僧の一人であったことが判明するであろう。

（2）公家社会における闌坡景茝

～禅僧の公家社会への接近

「謀叛人」の出自、「無門派者」「低位次」にもかかわらず、闌坡の禁中を中心にした公家社会における活躍にはめざましいものがある。（公家社会に対する異常なほどの接近の理由の一に、上記のような劣等意識の存在が考えられないだろうか。）

例えば、任意の年・ここでは文明十一年と十六年の御湯殿上日記（文明十一年正月～六月の記事欠）・実隆公記（文明十一年十月～十二月、文明十六年五月～七月の記事欠。）に表われる闌坡景茝をみると、文明十一年には

（二月）7・21日。（三月）9・14・16・21日。（五月）20・26・28日。（六月）2・5日。（七月）26日。（八月）5・10・20日。（閏九月）2・4・6・8・10・14・18・20・21・22日。（十一月）23・26・29日。（十二月）2・14日

の多きにのぼる。文明十六年には

（二月）13・22・23・24・25・27・29日。（三月）20日。（九月）10日。

といった状態である。

そして、ついに死後には、

(53)〃南禅寺政長老闌坡景茝当七回云々、依先皇御飯依、為当今御沙汰被諡禅師号、然間不及公方御礼之由、記録物沙汰、認勅書遣之、一重代自長橋局可捨云々、〃　（拾芥記　永正4・2・28）

と、後柏原帝より禅師号が降されている。先皇・後土御門帝の御帰依がその理由である。

以下、闌坡の禁中活動を中心に検討したい。

(イ) 講釈について

闌坡景茝の禁中におけるおもな講釈は、「三体詩」と「黄山谷詩」である。

三体詩講は、文明十年十二月三日に

(54)〃せんせゐたうに三てい詩よませらるゝ、おとこたちしこうにて、ちやうもんあり、〃　（御湯殿上日記　文明10・12・3）

(55)〃八時分参内、為三体詩御談義聴聞也、南禅寺仙館西堂闌坡講尺也、廊〔序〕計也、〃　（大日本史料所収・兼顕卿記　文明10・12・3）

と開講され、初日には「序」が講ぜられている。同五日には、

(56)〃直参内、三體詩御談義也、既華清宮詩読進之程也、題崔処士

林亭云詩マテ八首読進、〃　（大日本史料所収・兼頭卿記　文明10・12・5）

とあり、巻頭詩・杜常の〃華清宮〃から、王維の〃題崔処士林亭〃詩まで八首講じている。

(57)〃三躰詩講尺、絶句今日終其功、繡嶺宮詩等感慨無比類者也、〃　（実隆公記　文明11・3・21）

と、翌文明十一年三月廿一日に絶句の巻が終功している。「感慨無比類者也」とは、実隆の評であるが、注意される。

七言律詩は、文明十一年五月廿日より、

(58)〃昼間蘭坡三躰詩八句初度講談云々、為聴聞参内、至感陽懐古十首被講之、頗驚耳者也、〃　（実隆公記　文明11・5・20）

と、始められる。韓偓の〃同題仙遊観〃詩から許渾の〃咸陽懐古〃詩まで十首、現行の「増註三體詩」と一致している。

七言律詩の巻終講と、五言律詩の巻開講の時期については不明である。が、

(59)〃今日蘭坡三體詩五言講釈也、有召之間参内、及晩退出、〃　（実隆公記　文明11・閏9・2）

と、文明十一年閏九月二日が五言律詩の講尺開始日ではないかと考えている。（御湯殿上日記によると、八月十日に講釈の記事があり、九月には開講された形跡がない。）

全巻・三体詩講が終了するのは、

(60)〃たむきけふまてする〳〵とはてゝ、御ふせに御かうはこ、御ほん、十帖つかはさるゝ、かしこまり申さるゝ、御たいめんもあり、〃　（御湯殿上日記　文明11・閏9・22）

と、文明十一年閏九月廿二日のことである。

この蘭坡景茝の三体詩講に対して、

(61)〃抑蘭坡和尚於禁裏有三體詩之談義、此事僧達携文校参仕之、如公界之談義、群集希代之次第也、不可然之由謳歌、〃　（大日本史料所収・晴富宿禰記　文明10・12・17）

のように、初期においては当惑の態であった点、注目される。

三体詩の講釈が好評裡に終講したからか、同文明十一年十一月からは黄山谷詩の講釈が開かれている。

(62)〃けふより三こくのたむき、らんは申さるゝ、〃　（御湯殿上日記　文明11・11・23）

蘭坡の山谷詩講、その終講の時期が明らかでない。断続的に延徳二年まで記事は存在する。延徳二年十月七日に、

(63)〃らんはの御たんきけふまて申さるゝ、きんらんすへてつかはさるゝ、〃　（御湯殿上日記　延徳2・10・7）

とあり、終講日とも考えられる。（文明15年9月15日に巻十三を講義、延徳2年閏8月11日に巻十三を終了、同9月18日に巻十八終了の記事あり。）

廿巻本のテキストだとすると可能性はある。）

蘭坡は、文明十三・四年以後、禅林において多忙になる。（住院歴参照）

講義が断続的になった一の原因である。

三体詩、黄山谷詩のほかには

(64)〃今之天子、文思神武、固天縦也、蘭坡長老、腸座以講心経、吉田三位、昇殿以読神書、千載嘉会也、万機之暇、旁及于此、吁盛矣哉、景三記、〃　（補庵京華続集・文明十二年作品「応制詩三首」の後註）

とあり、心経の講釈をしていたことも判明する。

闌坡景臣の講釈の成功が、後土御門・後柏原帝の禁中に禅僧を講師とする講釈の道を開き、禅僧の地位を向上させたことは明らかである。

(ロ) 詩・連句・連句連歌について

闌坡の宮中・公家社会における活躍は、講釈だけに止まらなかった。三体詩の講釈とともに、連句・連句連歌会への参加も始まっている。

(65) 〃今日三体詩講尺也、彼席事散之後有御和漢、彼召加闌坡者也、懐紙名字之事如何之由勅問之間相談教秀卿、道号可然歟之間令書闌坡者也……〃（実隆公記 文明11・3・16）

三体詩講の後に和漢連句会が開かれ、闌坡も参加しているが、不意の参加に周囲の人がとまどっているさまがうかがえる。

(66) 〃闌坡三體詩講釈已後有御和漢、…中略…

蝶は夢菊は久しきうつゝかな

枕清残月辺　闌坡　〃（実隆公記 文明11・閏9・4）

闌坡は漢衆として参加しており、天皇の御発句に対して入韻するばあいが多い。（実隆公記の文明11・閏9・21、文明12・9・8、文明13・3・19、文明17・5・4、文明18・4・28等を参照のこと。闌坡の入韻句の記載あり。）

闌坡は三体詩講釈が終了した後も、

(67) 〃御わかん御さたあり、らんはちらとまいらるゝ、〃（御湯殿上日記 文明12・11・18）

(68) 〃御わかん御さたあり、らんはもしこう、〃（御湯殿上日記 文明12・11・30）

(69) 〃あすか井の大納言入たう、らんはなとめして御わかんあり、宮の御かたも御いてあり、〃（御湯殿上日記 文明15・4・21）

(70) 〃朝瞻之後参内、被召南禅寺、有和漢御会、〃（実隆公記 文明18・4・28）

と、しばしば参仕している。

闌坡は、文明十六年二月廿三・四・五に興行された千句和漢にも参仕している。（拙稿「連句連歌会の形態」参照）

また、闌坡は、和漢連句のうち

(71) 〃抑和漢去十三日御懐帋漢点闌坡、和点左府相分進■(上)云々、遐迩之儀有興々、〃（実隆公記 文明18・5・16）

と、漢句の合点を依頼されている。

講尺を通じて連句会との接触も有するようになる。

(72) 〃三てゐ詩のたむきあり、そのゝち御れんくありて、くわんしゆう寺、らんはもしこう、〃（御湯殿上日記 文明11・8・10）

禁中の月次連句会は文明十五年八月十日より、十日を式日としているが、

(73) 〃禁裏月次聯句御会也、……、闌坡不期而参候、于時一折終之程也、七十句終之後退出、〃（実隆公記 文明15・10・10）

(74) 〃月なみの御れんくにて、はんせう、らんは、そのほかそうたちしこう、〃（御湯殿上日記 文明15・12・10）

と、定期的にではないが参仕している。

(75) 〃らんはめして御れんく御さたあり、〃（御湯殿上日記 文明13・9・13）

と、特別に召されることも多い。

蘭坡の連句における力量は公家社会において非常に高く評価されている。

(76)〃今日御法楽御聯句也、……中略……、昨暁御夢脇孫三笑ト云句ヲ被御覧、一字御忘却云々、仍被仰談蘭坡、被加座字、〃
（実隆公記 文明15・2・11）

(77)〃抑今日於禁裏蘭坡・横川・天隠三人聯句可有御興行■、兼以御沙汰之処、横川故障之間停止云々、無念々々、〃
（実隆公記 文明16・3・20）

(78)〃正喬蔵主来、勧一盞雑談、……中略……、聯句事又蘭坡句、欲繻下生仏ト云句ニ、応盆羅睺児　蘭坡
盆之字奇中奇也、〃
（実隆公記 明応5・11・15）

(76)は、帝の夢想句について、一字「座」字を補うことを進言している。(77)は、横川・天隠と三人による連句興行が計画されていたことが判明する。(78)は、蘭坡句の「盆」字を〃奇中奇〃としている。連句の合点・添削依頼も多い。

(79)〃今日去月御聯句三方蘭坡・天隠・横川、点勝負々態各申沙汰之、〃
（実隆公記 文明15・9・13）

(80)〃後日聞、此上句蘭坡合点、褒美云々、自愛々々、〃
（実隆公記 文明16・9・10）

(81)〃去夜夢中被染宸筆有御連句、王喬遮径鳥ト云句ニ、劉倫過郵鞍ト予続之、蘭坡ニ相談云、劉倫ハ声悪シ、孟郊ト云ヘキ歟、東野ト云ヘキ歟ト談之ト覚キ、此事彼御詩拝見之時此子細以書状言上了、〃
（実隆公記 延徳3・1・12）

(82)〃中秋御聯句蘭坡点到来、名字付之了、〃
（実隆公記 明応6・8・28）

(79)は八月十日に興行された連句に対する三方点の記事である。(80)は実隆の上句に対する註である。上句は省略した。

蘭坡は詩僧としても参仕している。

(83)〃入夜参内、今日月次詩御会題花有和気、懐紙各取集之持参蘭坡勘進、了、〃
（実隆公記 文明13・2・29）

(84)〃蘭坡和尚山谷詩十六巻終、講尺、於黒戸有此事、聴聞有感、十五夜公宴愚作題終夜著芦声、仰彼和尚之添削了、晩頭退出、〃
（実隆公記 延徳2・閏8・11）

(85)〃午後蘭坡和尚光臨、被談先日公宴之間事、其外雑談有興、〃
（実隆公記 明応5・5・17）

(83)は、月次詩会の詩題を撰進している。(84)は公宴詩会における実隆詩を添削している。(85)は、公宴詩会のことについて談じている。

このほか、蘭坡に関して著名なのは、文明十二年八月に

(86)〃蘭坡山谷講尺有之、談義之後先聖先師、大学寮十哲等影於紫宸殿開之、令拝見于蘭坡了、抑本朝名所、十五、人名、十五、江湖之衆詩可作進之由被仰下蘭坡、巨細勅定之趣予仰含之者

也、〃　　（実隆公記 文明12・8・14）

と、闌坡が仲介をして、五山僧徒に詩を詠進させていることである。「禅林応制詩」「文明易然集」である。また、文明十五年正月十三日の「詩歌合」（群書類従所収）にも禅僧達の筆頭として詠進している。

上記二事については、先人の論も多いので本稿では省略する。

闌坡も、老年になり、禅林において多忙になるにつれ、朝廷への参仕も稀になってくる。かわりに、闌坡の弟子達が、

(87)〃朝飡之後参内、今日月次聯句御会也、参仕人々、……中略……、正桑蔵主、今日初参、闌坡弟■、予於鞍馬所相知者■■、〃　　（実隆公記 文明15・11・10）

のように、参仕するようになっている。

従来、宮中における諸文芸に禅僧が参加した例がなかったわけではない。が、それはおゝむね宮家・公家出身の僧であった。出自・門閥とも特別に秀でていたわけではない闌坡が、ただその漢・詩才によって宮中社会に接触を有したことは、大きな意義がある。

ただし、闌坡が公家社会に出入したことが禅林における記録類・作品類にあまりとり上げられていないというのも事実である。雪樵独唱集にもとり上げていない。禅林にとって、闌坡自身にとって、宮中社会と交渉することが、どのような意味を有していたかは不明である。我々が五山文学を考える時に見逃せない点である。

――広島大学大学院学生――